旧三条村から見た精道村風景　明治末期

遡
ASHIYA

Ⅰ　芦屋の遺跡

南に大阪湾を望み、北に六甲山を背負う芦屋の地。この一帯が農地から住宅地へと変わっていったのは、近代に入ってからのことです。しかし、もともと生活するのに適した土地であったことは、多くの古代遺跡が発見されていることからもうかがわれます。

市内最古の遺跡として知られる山芦屋遺跡からは石の鏃（やじり）などが数多く出土し、この地での狩猟生活の繁栄ぶりを示しています。

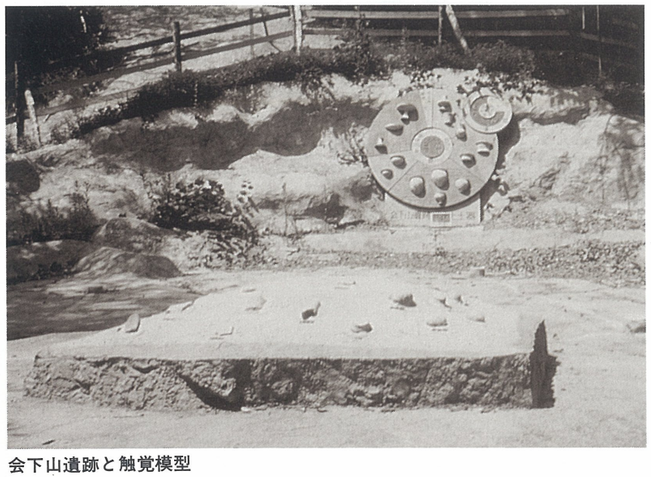
また会下山の山頂近辺からは弥生文化期集落の跡が発見されています。眺望のすばらしい土地に立つこの集落は〝高地性集落〟と呼ばれる遺跡で、円形竪穴の住居のほかに高床式の倉庫や祭祀場の跡も残っています。

狩猟から農耕へと生活の形が移り変わっていくなかで、芦屋の地にひとびとが定住するようになってきました。そんなようすが、これらの遺跡や古墳時代の群集墳などからも想像されるのです。

やがて生産物の蓄積によって階層が分化し、豪族が誕生しはじめると、大和朝廷は中央集権国家のもとに民衆の統合にのりだします。7～8世紀、大化の改新と律令制により、夙川から生田川までの地方は摂津の国のうち、菟原（うない）郡となりました。

会下山遺跡

芦屋廃寺跡発掘調査



会下山遺跡と触覚模型

会下山遺跡出土の打製・磨製石鏃